

日本における境界とかけ橋の創出—コンフルエンス（無境界）の文化

岡田法悦（AAGT 会議におけるレクチャー）

宮田はる子 訳

日本におけるゲシュタルトセラピーがどのように広がってきたかを皆さんにここで報告することができることを大変嬉しく思います。日本ではゲシュタルトセラピーはまだ認知度が高くはありませんが、この 10 年での広がりには確かなものであり、我々は更に広めていこうと働き続けています。

私が体験した初のゲシュタルトワークショップは 1986 年の日本においてでした。1987 年には、サンフランシスコゲシュタルトインスティテュートが開催したワークショップに参加しました。その時、ワークが終わった後の一人の女性の発言に驚かされました。彼女はこう言ったのです。「私はみんなと同じでいてもいいんですか？ ああ、安心しました。」私が驚いたのは、逆の発言、つまり「私はみんなと違っていてもいいんですか？ ああ、安心しました」というのに慣れていたので。これが、日本人がよくワークの後に言う言葉なのです。

日本人にとって、周りとは違うことは恥ずべきことであり、人々は周りに合わせようと努力しています。母親たちはよく「誰もそんなことしてないでしょう！ 他の子たちとどうして違うことをしているの？ 恥ずかしいでしょう！」と子供たちを叱ります。

日本はコンフルエンス（無境界）の文化です。今日は「違い」を認め合うことが日本の文化をいかに豊かで創造的にすることに通じるか、日本人にとってゲシュタルトセラピーが、特にファシリテーターがロジャーズ的態度や受容の態度で行うワークが、どう役立つのか、お話ししたいと思います。

明確な境界線がなければ、かけ橋は存在しないのです。

このことについて 1 時間ほどお話しをしてから、どなたかと、私が日本で通常行っている形のワークをやってみたいと思います。

私は 1986 年からゲシュタルトセラピーの勉強を始めました。先生は米国、サンフランシスコゲシュタルトインスティテュートの元所長であったポーラ・ボトム博士でした。彼女は 1980 年代初頭に来日し、日本に半年ほど滞在し、残りの半年はアメリカで過ごす生活をしていました。私は彼女の通訳を 3 年ほど務め、結果としてそれがゲシュタルトを学ぶ

には最高の機会であったと感じています。

私は産業カウンセラーの資格を持ち、2万人の会員数を誇る日本産業カウンセラー協会の会員でもあり、その会員たちにゲシュタルトを教えています。ゲシュタルトアソシエイツというゲシュタルトを学ぶグループも2000年に発足し、今では50人もメンバーが学んでいます。更に私は、まだまだ少ないですが、日本中のゲシュタルトセラピストのつながりを創ろうとしている会である日本ゲシュタルト療法連絡協議会のメンバーの一人でもあります。実際、ゲシュタルトを教えることができるファシリテーターは日本には10人ほどしか居ません。

また、私は日本で最初にゲシュタルトセラピーの本を日本語で書いたことを付け加えておきます。

1. コンフルエンス（無境界）の文化と日本人にとっての役割演技の効果

A) 主語のない会話

さて、日本の文化を観察して一番明確にコンフルエンス文化を表しているのは、「私」とか「あなた」等の主語を日常会話の中で使わない傾向です。

私は日本語を外国人に教えた経験があります。文法的に日本語は「私」「あなた」の主語がありますので、私はこう教えていました。

「私は買い物に行きます。私が帰ってくるまでにあなたは宿題を終わらせてなくちゃだめよ。」

それは私にとって自然な響きではなく、少し変な感じがしました。私たちにとって言い慣れているのは、次のような会話だからです。

「買い物に行ってきます。帰ってくるまでに宿題終わらせておかななくちゃだめよ。」

「何時ころ帰ってくるの？」

「1時間ほどで戻るわ。」

多分皆さんは、誰が誰に話かけているのかこの形ではわからないと思いますが、私たち日本人にとってはイントネーションや話し方でそれは明解です。

日本語が主語を使わないということが、日本人が「私」と「あなた」を明確に区別する習慣を実際持っていないことの現れだと思います。

私たち日本人は、自分が同じ種類の人々の集団の一員であると思うと安全を感じるために、そうありたいと思う傾向があります。同じ種類の服を着て、同じような音楽を聴き、・・・などです。個性的であればグループから外れてしまい、異端者であるとみなされます。も

しあなたが周りの人たちから同じであると思われれば、彼らも安心し、あなたのことを、自分たちと同じことをし、同じことに笑い、同じことに怒り、同じ頃にお腹が空きそして同じものを食べる人である、と思うことでしょう。レストランで、よく人々は「私も同じものを」と注文します。私たちは周りとは違いたくないのです。

B) 名前を使わない会話

同時に、コンフルエンスの文化は役割演技の文化を形成していることにも寄与しています。私たちは「私」「あなた」の主語を使わないだけではなく、特に公的な場では自分たちのことを互いの名前で呼ぶことはしません。例えば、学校や病院にはたくさんの「先生」がいます。「先生」とは教師であり、医師、もしくはあなたよりも目上の人を指します。セラピストやカウンセラーもよく「先生」と呼ばれます。(元来の意味は、自分より先に生まれた人のことを指します。)

学校や病院では、「あなた」と使う代わりに「先生」と呼び合います。例えば、「今忙しいですか？」と聞く時に「先生はお忙しいですか？」と尋ねます。同時に2・3人の教師に話かけるときだけ名前を使います。その時でさえ、「スミス先生」「ロビンソン先生」と呼びます(これは皆さんの国でも同様で、医師同士が普通に「ドクター・スミス」「ドクター・ワトソン」と呼び合っているでしょう)。教師は生徒達に対して自分のことを言うとき「先生」を使います。つまり「私のいうことを聞きなさい」という代わりに「先生のいうことを聞きなさい」と言うのです。

また会社では、彼らは肩書きで呼び合います。特に自分より上の位の人を呼ぶときは肩書きを使います。上の位の人にむかって、相手の名前を呼ぶことは失礼にあたると思われるのです。今日の外資系の企業などでは、「鈴木さん」「福田さん」などの姓で呼んでいるところもありますが、普通は「社長」「部長」などの肩書きで呼んでいます。

これは、日本人が人を個人として見ることを避け、人を役割としてみなすことを好むということでしょう。これは家庭でさえもみられます。例えばこんな会話が聞かれるのです。「お父さん、お腹空いたよ。お兄さんは?」「お兄さんはケーキを食べたよ。母さんはどうした?」「母さんもお腹すいてないって。」

パールズは役割演技を神経症的な行動としています。この視点で言えば、日本人の多くは神経症的な形で行動していると言わざるを得ません。実際、ゲシュタルトのワークショップで無意識的に役割演技をしている人たちを多く目にします。例えば、人々は成長した後でも自分の親たちに対して良い子供を演じ、中年になっても「いい子」でいて、そのこと

が多く、の面から彼らの人生を縛ることになっていたりするのです。

日本においてゲシュタルトファシリテーターとして注意しなければならないことは、人々はファシリテーターを、一個人としてではない役割として無意識的にとらえてしまい、それに対して「よい、もしくは悪い」クライアントの役割を演じる可能性があるということです。

2. 違いが「恥」を意味するときに境界線をつくることの困難さ

A) 西洋と日本における「社会的に恥ずかしい、あるいは認められる存在」の違い

もちろん、コンフルエンスや役割演技の行為は多かれ少なかれ西洋文化圏でも見られることと思います。日本でも数十年前に比べると減ってきてはいるものの、まだコンフルエンスの傾向は非常に強いと言わざるを得ません。

人々が周りとは違いたくない、そして周りとは違っていると恥だと思うことは、「私」と「あなた」の境界を創ることを困難にさせています。

どうして周りとは違おうと恥だと感じるのでしょうか？ それは役割演技傾向とも強いつながりを持っています。

人々は自分の性格や感情を見せることなく社会的役割を演じることを期待されています。「先生」は彼らの生徒や親、その他の教師の前で社会的に認められる教職者としてふるまうことを期待されています。オフィスの部長は、スミスさんやジョンソンさんではなく、役員や大多数の従業員が期待する部長役を演じられる人です。

良いマネージャーとは頭のよい有能な人間ではなく、首のすげ替えがきくマネージャーを指すようです。つまり他のマネージャーと同様に期待されるマネージャー像が演じられる人なら誰とでもすげ替えがきくということです。

西洋文化圏では、有能さがビジネスの世界で人々の評価を左右するものと理解しています。日本でもそれが全く違うとはいいません。有能さは必要です。同時に、その人が傑出して頭がよく有能であっても、独創的で他の人々の期待にそむくことをすれば、つまり職場に求められる調和を壊したり、期待される役割と彼の行動が合わないならば、それが良かれと思ってのことでも彼が素晴らしいマネージャーとみなされないことが多いでしょう。

B) 封建的、共依存的な社会の中での「恥」の意味

この傾向は明らかに歴史の中から生まれてきました。

1603年から1867年まで、日本は江戸時代と呼ばれる平和な繁栄の時代を送りました。この3世紀の間、日本は鎖国状態となります。外交や貿易は政府によって阻止されました。日本はこの時代に、独自の豊かな文化を発展させました。そして同時に、確固たる封建的な社会を作り上げることにもなりました。

この時代には4つの階級がありました。武士が最上位、農民が次位、工務が3位、商人が最低位として階級づけられていました。これらの位は世襲制であり、それぞれの位において、ふるまいや言葉などしきたり、つまり役割演技の方法があったのです。

もし誰かがそのしきたりとは違うことをすれば、変わっていると思われるだけでなく犯罪的でさえありました。子どもたちは彼らの個性や性格を無視して、属している位でのしきたりを教え込まれました。自分の役割を演じられる子供は良い子でした。その役割を演じられないことを恥じることも同時に教え込まれたのです。

家族の中では、父が長であり、それ以外の人たちは父に従わなければなりません。長男は家長を継ぐための学習をしました。妻は家に常に居て家事と子供たちの世話をすることが当然とされました。

江戸時代の日本の家屋は、特に都市では、薄い木の壁と紙のドアで作られた長屋が通常でした。人々はプライバシーも守られないこのような家に住んでいました。人々はトイレを他の家族と共有しました。専用の風呂もないので、公共の風呂へ行き、大きな湯船を共有するのです。(体は湯船の外で洗い、湯船は湯につかり体を温めるだけです。)

このようにプライバシーがない中、長屋に住む複数の家族は共存する1つの大きな家族となり、大家が彼らの父的存在となります。子どもが結婚する年頃になれば、大家は適当な男子や女子を見つけってきます。結婚式に当人同士が初対面の時も珍しくはありませんでした。夫も妻も彼らが社会を形成するための役割であり、彼らはその役割を上手く演じることを求められたのです。

ですから、日本の文化から見ての「恥」とは、自分の役割を上手く演じられないことや、自分の感情や欲望を表して役割外の振る舞いをするということの意味が多分に含まれるのです。もし自分の位で周りがやっていることをできなければ、恥すべき人間なのです。人と違うことは恥ずかしいこと、と教え込まれるのです。

ゲイリー・ヨンテフによると、彼の著書「気づき、対話、そしてプロセス：ゲシュタルトセラピーにおける随筆」の中で、西洋文化圏における恥についてこう言っています。「恥を感じる人達は、自分と自分が理想とする姿を比較して、現実の体験よりも理想像に同一化しようと願う。彼らは現実の自分と描いた理想像との差の程度に応じた恥を感じるのである。」

第2次世界大戦の戦下、日本の空軍は、片道の燃料を積んで米軍機に飛びこんで激突する特攻隊と呼ばれていました。彼らは天皇のために戦いました。彼らの生命は彼らのためのものではなく天皇のものでした。天皇のために生命を捧げることは誇りであると信じ、そのようにふるまったのです。戦争が終了した時、兵士の多くは、敵軍に捕らわれることは最大の恥とし、米軍の捕虜となる前に自害しました。しかし、捕虜となった兵士もいました。

彼らは終戦後、捕虜となりどうふるまったか想像できますか？

米国人は、日本人がアメリカ人に服従することに対して力の限り抵抗するだろうと考えました。しかし、彼らは日本人兵士が逆に非常に素直で従順であることにびっくりしました。米軍は、天皇に身を捧げるほどの日本兵士は非常に強い理想の自分像を描き、敵に服従することを恥じる人たちであろうと考えていました。しかしながら、それとは反対に、日本人兵士の頭には、一度捕虜となったからには彼らの上官は米軍であり、従属者としての役割に徹しなければならぬと考えたのです。

C) アイデンティティは画一性から派生したもの

日本人にとって封建的江戸時代は、人のアイデンティティは個人ではなくその家族においてそして所属する位において期待された役割、武士であれば自分が仕える殿様が期待する役割、をこなすことでありました。もしある人が同類であれば、周りは同じように感じ、考え、言葉がなくても理解してくれると信じていることで安心ができるのです。つまり、その人々は一心同体なのです。

同類であると信じられるコンフルエンス的關係づくりは、現在に至っても減びてはおらず、私たちの代まで続いていると思います。今日においても、個人個人が誰であるかということより、どんな学校や大学を卒業し、どんな企業に所属し、どんな位にいるか、などの方がよっぽど大切なようなのです。

日本の中学・高校には制服があるあります。教師は生徒に、教師が期待する画一的行動を

求めます。生徒の多くはそれらに従いますが、数名は反抗します。反抗する生徒達は個人主義に走るかわりに一緒になって行動し、彼らなりの画一性を形成し「同類」となるのです。

20代の初期に、私は3年ほどをイギリスで過ごし、帰国しました。帰国してからしばらくしたある夜、私はクラブに友人達と行き、若者達が踊っている姿を見て不思議な感覚を覚え、退屈に感じました。私が見たものは、全員が同じ向きで、正確に同じ踊り方で踊っている若者達でした。私は踊らずにその場をあとにしました。

終戦後の日本における産業の著しい発展はこの画一性の様式に起因すると思います。高品質の製品の大量生産には、工場の全従業員が同じように労働を提供する必要がありました。違いは必要とされなかったのです。

これが日本で見られる画一性の様式であり、それは現在に至っても非常に大切なものとされています（ダンスの踊り方はなんとか少しは変わって来ましたが）。我々は同じ種類のグループに所属し「一員」でいることに安心を覚えるのです。

それとは反対に、この様式は現代社会の家族構成の中では壊れつつあります。そしてこのことは日本人に一定のストレスを与えています。数十年前までは、特に村落では、両親や兄弟だけでなく祖父母や叔父・叔母、親戚などと一緒に住み、人々は大きな家族で育つことが多くありました。しかしながら現代では、3・4人の家族、核家族となっています。

更に、子供たちは放課後に友達と外へ遊びには行きません。その代わりに、多くは夕食時まで塾に行きます。夕食後は自分たちの部屋でコンピューターゲームで遊びます。多くは家族と同じように友達とも親密な関係を失っています。彼らはどこかに属しているという感覚が無いのです。

しかしながら、専業主婦として家に居る時間がある母親は、子供を教育することに全身全霊を注ぐことが少なくありません。子供は母に服従し、母が全てをやってくれることを期待します。こうして子供と母親の共依存が形成されます。これが、引きこもりと呼ばれる状態につながっていきます。現代、自分の部屋に常にこもり、外出せず、誰か（家族とも）と接触することを拒んでいる沢山の引きこもり(時には10年以上も)の若者が存在します。150万~300万人ほどの人数ともなり、それは日本人全人口の1~2%ほどになります。母親は食事を彼らの部屋の前まで運び置き、母が去った後、引きこもりの子供はドアを開けて食べ物を取って食べるのです。

5年ほど前まで、私はこのような母親たちの集まりで数年間ワークショップを開催していました。彼らの多くは同じことを言いました。「私の子供はいい子なんです。20歳になるまで彼は反抗することはありませんでした。ある日突然彼は暴力をふるい、私たちを殴り、蹴り、家具を壊しました。それは数か月続き、暴力が止まったとたん、今度は部屋に閉じこもり、出てこなくなると数年経ちます。」

学校でのいじめも多数報告されています。私は、スケープゴートに自分たちの“違い”を投影していじめ、そのことでクラスの子たちとの同一性を維持しようとするところからそれが起きると考えています。毎年いじめられた多くの子供たちが自殺します。ここでも同じ種類の信念は働いています。もしグループの画一性に属していなければ、教室では1人としてカウントされず、無視され、暴力をふるわれ、いじめられることになります。反対に、もしどこにも属していない、あるいはどのグループとの同一性も感じないならば、自分を社会の一員として認めることができず、社会から疎外されていると感じてしまうのです。

よって、社会に認められるためには、所属しているグループによく適応するために期待される役割をこなさなければならず、他のメンバーとのコンフルエンスを形成することになるのです。

3. ファシリテーターによる直面化あるいは関係性のアプローチよりもロジャーズや受容の態度の必要性

A) ワークショップにおける役割演技の拒否

予想されるように、ゲシュタルトワークショップに来る人々はクライアントの役を演じ、ファシリテーターに対してリードする役割を期待することがあります。もちろん、日本だけではなく他の国でも起こることだと思われます。本物の「私と汝」の関係性を築くことは難しいのです。特に、ファシリテーターが一定の期待や意図を持って、ファシリテーターが望む結果に向けてクライアントを導こうとすると、ファシリテーターは指導者やコントロールする者の役割を演じやすくなります。そうすると、クライアントは従う役を演じます。それによって、ファシリテーターがワークの結果の責任をもつ人とみなされるようなことが起きるのです。

日本では、人々はセラピストやカウンセラーのもとを訪れることはまだまれです。セラピストやカウンセラーはクライアントを癒し、治療し、問題を解決する専門家とみなされています。クライアントは処方術や答えを求めます。そのために彼らはお金を払うのです。

(「先生」という言葉の意味を覚えていますよね?)

私の目には、残念なことにこの形のカウンセラーが多数存在するよう見えています。彼らはカウンセラーという役割をよくこなし、クライアントの期待に応えようと努め、そのことでクライアントの依存を引き出します。誰かに依存したいクライアントと、商売を繁盛させたいカウンセラーとの共依存が生まれます。

反対に、もし私が明確な境界線を引き「あなたはあなたの選択に責任を持つ人です。あなたがあなたの問題を解決する人です。」と言ったならば、多くの人はだまされたと思うでしょう。

もし私がこのような共依存を希望しないとしたならば、私が必要なのは「私」と「あなた」の明確な境界線です。ファシリテーターとしての私は人が何を語るかよりも、どのように語るかを観察します。そして私は私が見たもの、私が聞いたものをフィードバックし、何か実験を提案します。ワークはそのように進むものです。

もし私が目の前のクライアントに対して何か意図を持っていたとしたら、私はクライアントをコントロール下に置きたくなるでしょう。私はクライアントを私が提案することに任せ、「ノー」と言ってほしくなくなるでしょう。もし私が提案した実験が、私が想定した通りの結果になったならば、私はとても満足するでしょう。もしそうならなかったら、私は残念に感じるでしょう。そこには「私」と「あなた」の境界線がなくなっている、ということです。私は指導者の役割をこなしているのです。

反対に、もし私が何の意図ももたずに実験を提案したら、私はクライアントが選択をする者として、受け入れようが拒否しようがどちらを選ぼうとも、どちらも聞き入れることができるでしょう。もしクライアントが私の提案を受け入れたならば結果はどうであれ、私はクライアントが何か新しいものに気付いたことに嬉しく感じるでしょう。もしクライアントが実験を拒否したならば、私はただクライアントが何を感じているか、何をしたいかを尋ねるでしょう。これが「私」と「あなた」の明確な境界線を持ち、クライアントの主体性を尊重する、ということです。

これがゲシュタルトセラピーの基本的な態度です。同時に、「先生」の前で服従する役割を自動的にこなすだろう日本人のクライアントにとっては難しいことだと思われます。

B) 目に見えない、透明人間ファシリテーター

私の体験から見出した日本人クライアントに対して上手くいく方法は、自己内対話、2つもしくはそれ以上の自分の部分との対話をファシリテートすることです。もちろんこれも古典的で初歩的なゲシュタルトの技法、エンプティチェアです。

特にここで強調したいことは、特にクライアントがエンプティチェアのワークを進めている時、クライアントがワークにとっても集中し、彼らの前に居るファシリテーターの存在すら忘れるように自己内対話をファシリテートするということです。つまり、透明人間ファシリテーターです。

そうすることでクライアントは、ファシリテーターがクライアントと関わりを持っているのではなく、自分自身だけと向き合っている状態がつかれます。このために、ファシリテーターのクライアントへの関わりは最小限にとどめる必要があると考えます。

ファシリテーターやグループのメンバーの存在（プレゼンス）はクライアントが安全と感じる場を保つためにも、もちろん大切です。その安全な場がクライアント自身の内的世界の気づきに集中できるようにしているのです。クライアントは自分の内側の世界に置かれていることを感じながら、同時に一人ぼっちでは感じません。ここで必要なのは、ファシリテーターとグループのメンバーの存在（プレゼンス）であり関係ではないのです。クライアントは他の誰かとではなく、自分自身と対面するのです。そうすれば、クライアントはファシリテーターや他のメンバーとの関係において役割を演じる必要がなくなります。その代わりに、自分の部分部分の役割を演じて、葛藤を起こしたり統合したりすることができるのです。ファシリテーターとグループのメンバーは常に、ただの存在（プレゼンス）、もしくは「安全な場」としてそこにいるのです。

コンタクトは存在と同じくらい大切です。必要な時、私はクライアントにできる限り私以外のグループのメンバーの誰かとコンタクトすることを提案します。一方、クライアントが誰とコンタクトを取ろうと、何を言おうと、何をしよう、それはグループのメンバーの誰かと関わりをもつということではなく、クライアント自身がそうすることで自分にとってどう聞こえるか、そうすることで自分がどう感じるかを確かめるためにすることなのだということを、私は明確にしておきます。その人は、自身の内的世界を探訪しているのですから。

C) ロジャーズの態度：無条件の肯定的関心

クライアントのために安全な場を創るために、ファシリテーターはクライアントが見せるどんな感情にも、どんな振る舞いにも受容的である必要があります。そうすることで初め

クライアントは「今・ここ」にいる存在としての自分を体験することができるのです。逆説的変容の理論にあるように、ありのままの自分を体験するということがとても重要です。クライアントが何を感じようが何をしようが、そのことをクライアント自身が体験し、それをすることができる安全性を感じる必要があるのです。もしクライアントが深い悲しみの中に居る時、その人はそれを感じつくす必要があります。クライアントが怒りの中に居る時、その人はその感情を恥ずかしいと感じることなく表現する必要があります。その人が恥ずかしいと感じている時でさえ、そう感じている自分を恥ずかしがらずに、恥ずかしさを感じ取る場が必要です。つまり、クライアントが無条件の肯定的関心をもって受け入れられていると感じることが必要だということになります。すなわち、ロジャーズ的姿勢です。

私はクライアントとワークをする時は、いつもこの態度で臨んでいたいと思っています。そうすることによって、クライアントが体験する関係性や直面化が、全てクライアントの中で起こっているものになるのです。

パールズのワークの映像である「グロリアと3人のセラピスト」を見ると何か奇妙な感じを受けますが、私はフリッツ・パールズやローラ・パールズ、その他古典的なゲシュタルト療法家の著書を読み、この無条件の肯定的関心の姿勢に矛盾する叙述をこれまで目にしたことはありません。

D) 関係性をもたない受容の態度

「川を押すことはない。それは自分で勝手に流れるものだ。」とパールズは言っています。そして私はこの、クライアントの感情や体験の流れをさまたげないこと、邪魔しないことこそがファシリテーターの仕事だと思っています。なぜなら、この自己阻害そのものが、クライアントが日々の生活において自分自身でやっていることだと思うからです。

過去20年の私の経験から、このやり方でのファシリテーションが日本人クライアントには有効であることに私は自信を持っています。私はクライアントに受容の態度で半歩下がってただついていき、クライアントが私に語ったり見せたりするものを拾い、クライアント自身が自分への気づきや自分の「いま・ここ」の体験を遮ったり止めたりしないようにファシリテートしているのです。そして、私がその人と関わるのではなく、その人が自分と関わるよう促しながら、その人の内なる川が自ら流れていけるようにしているのです。

日本にはうつ病で苦しむ人が大勢存在します。毎年3万人以上の方が自殺で命を絶っているのが現状ですが、その数は事故死者数の3倍以上にもものぼります。うつ病と自殺の大き

な原因の1つは人間関係だと言われています。個々それぞれの「違い」を認めることへの拒否が主な原因となっているのです。

何度も申し上げてきましたが、関係性を持たない受容的態度は日本人クライアントにとって有効です。誰かと共依存の関係を持ったりコンフルエンスに陥ったり、役割演技をしたりすることなく、日本人クライアントが自立するためには非常に役立つ方法です。

日本人は元来とても独創的な人種です。我々はとても豊かな文化を作りあげてきました。私はその豊かさを回復するためにもゲシュタルトセラピストとして活動していきたいと考えています。

更に、私は、国を問わず多くの人にとって私が提案した方法が有効であると信じています。今後、皆さんの国で私がファシリテートする機会があることを願っています。世界中の素晴らしいゲシュタルトの指導者を日本へご招待したいとも考えています。そうすることで、皆さんのやり方を我々も吸収できるし、世界のスタンダードを確認し共有していくことができると思っています。そして同様に、私達も我々のファシリテートのやり方を皆さんの国で紹介する場を持ちたいと思っています。

それでは、私のワークのやり方がどのように違うか、どんなところが同じか見つけてみてください。どなたか私とワークをやってみたい方はいらっしゃいますか？